

国際常民文化研究機構／プロジェクト型共同研究（奨励）

宮城県気仙沼大島における遠洋漁業の歴史的変遷に関する研究

——震災救出資料を中心として——

期間：2016年4月1日～2019年3月31日

〔共同研究者〕

蝦名裕一（東北大学災害科学国際研究所）

小山由紀子（気仙沼大島漁協文庫の会）

川島秀一（東北大学災害科学国際研究所）

菊田榮四郎（気仙沼大島漁協文庫の会）

〔代表者〕千葉勝衛（気仙沼大島漁協文庫の会）

水上忠夫（気仙沼大島漁協文庫の会）

大川 啓（日本常民文化研究所）

〔業務協力者〕

小野寺佑紀（歴史民俗資料科学研究科
博士後期課程）

大島における遠洋漁業の歴史は中断した

研究代表者 千葉 勝衛

大島は昔から遠洋漁業が基幹産業で、男の人たちは学校を終えると当然のようにほとんどの人は漁船に乗り、幹部船員をめざして修業していた。その結果、大島は優秀な船長、機関長などの幹部船員を輩出する地として全国的に知られるようになっていた。

今回の私たちの研究では、そうした大島漁船員の栄光の歴史を書き進め、研究のまとめを書く段階で大きな課題に気づかせられた。

平成3（1991）年に大島出身の漁労長が71名もいて、全国各地で活躍していることを『神奈川大学日本常民文化研究所調査報告』第27集（2019）に記録したが、現在、現役で乗船している人は



写真1 大島漁協文庫にて定例会（2016年9月26日）

4、5人であることを知らされた。遠洋漁業最盛期の昭和50年代には一般船員は200名以上もいたが、高齢化が進み定年や減船などで下船する人が続出し、その上、新規学卒者の乗船ゼロが続き、今では地区全体で現役船員は50～60名といわれている状況である。

漁船員不足は昭和40年ごろから叫ばれていた。漁業団体はいろいろな対策を講じていたが改善せず、日本人船員の不足をカバーするため外国人船員の混乗を行うようになっていった。当初は1船2、3人程度であったが、最近では、船長・機関長など法定職員を除きすべて外国人という船も多いとのことである。

こうした現実を遠洋漁業発達の歴史の中でどう評価すべきかなどをメンバーで話し合ったが、適確な結論を得ることができなかった。現実を直視して考えてみて、混乗も遠洋漁業歴史の事実として理解し、遠洋漁業の新時代となったと納得することとしたのであった。

このような新時代を迎えた遠洋マグロ船の基地気仙沼港では、船会社も船も健在で、人手不足、資源の国際管理など大きな課題のある中で、伝統ある歴史を継承するためがんばっている。2019年6月には省力設備や船員居住室を充実するなど設備改善された、次世代マグロ船が進水したと地元新聞は報じている。更に8月はまだ1隻新造船が進水する予定とのことである。

このように気仙沼港における遠洋漁業は時代のニーズを吸収して新しい手法も取り入れて発展へと前進し始めている。

翻って大島の現状を考えてみた。当業者の船員が大きく減少していることから、遠洋漁業を基幹産業とする看板は残念ながら下ろさねばならないと考えている。私たちの研究がかつての栄光の歴史として読まれ、今後の遠洋漁業発展のために利用されることを期待している。

■ 2018年度の活動

- 第5回共同研究フォーラム「気仙沼大島における遠洋漁業の歴史——漁船員たちの航路をたどって——」2019年2月10日 気仙沼大島 大島公民館 千葉勝衛・蝦名裕一・大川啓・川島秀一・菊田榮四郎・小山由紀子・水上忠夫・小野寺佑紀・堺健（気仙沼・大島みらい創り協議会）・山内繁（気仙沼市文化財保護審議委員会委員長）
- 『宮城県気仙沼大島における遠洋漁業の歴史の変遷に関する研究——震災救出資料を中心として——』神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 第27集（国際常民文化研究機構 共同研究〔奨励〕調査報告書）2019年2月28日



写真2 川島秀一氏、大川啓氏、蝦名裕一氏を迎えての定例研究会（気仙沼大島公民館／2016年11月20日）

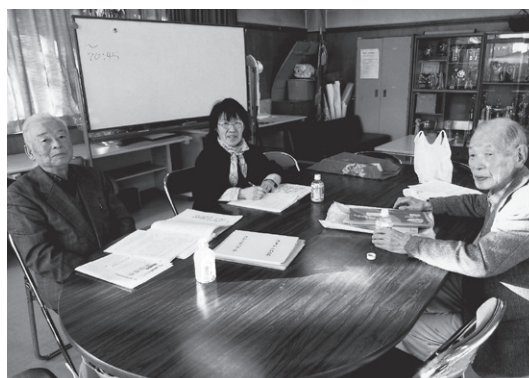


写真3 気仙沼大島公民館にて定例会（2016年12月12日）



写真4 浦の浜自治会館にて外畑文書の調査（2017年8月27日）